

巻頭言

私たちの手で自然史博物館を創り育てよう
池谷 仙之 (NPO 自然博ネット 理事長)

地球を人の一生にたとえるなら、地球はいま 47 億歳になります。こんな永い時間、地球は何をしてきたのでしょうか。さぞかし、多くの出来事を体験してきたに違いありません。そして、地球に寿命があるとすると、あと何年くらい存在するのでしょうか。地球上の生命は、このような地球の歴史のひとつとして、およそ 38 億年前に誕生しました。この生命が地球上に誕生したときから、生物が地球の環境をつくり変え、地球環境が生物の進化を促してきたように、生物と生物を取り巻く地球の環境は絶えず互いに密接に影響し合いながら今日に至っているのです。現在、私たちが認識している生物種、すなわち、名前が付けられている生物は 200 万種ほどです。しかし、これまでに地球上に現れ、すでに絶滅してしまった化石種や、私たちが直接見ることのできない地下深部や深海底などに生息するまだ名前のない生物を含めると、この地球上にはおびただしい数の生命体が生まれたことになり



第 2 回総会で挨拶する池谷理事長

なります。これらの生命の営みと、これらの生命を育ててきた地球の営みが「自然史」なのです。

私たち地球人は、この地球の「自然史」を理解し、「生命とそれを取り巻く環境」を大切に守っていかねばなりません。これは 21 世紀の人類に課せられた最大のテーマなのです。「自然史」を理解することは、身のまわりの自然を五感（視・聴・嗅・味・触）で感じ取ることからはじまり、豊かで神秘的に満ちた自然の「ふるまい」に感動し、その自然の「ありよう」をもっと深く知りたいたいと思う知的活動に他ならないのです。しかし、単に「花鳥風月を五感で感じ取る」だけでは、自然の「理（ことわり）」を理解することはできません。自然の神秘とその摂理を深く理解するためには、それなりのプロセスを必要とします。自然を観察し、標本を採集、整理、保管する方法や、さらに学術的に探究する手段などをサポートするのが自然史博物館なのです。

静岡県下には、すでに 100 を越す自然史系の学会や研究会、同好会が活動しています。写真や絵画、詩歌、ガーデニング、山登り、フィッシングなど、各種の愛好家集団も広い意味での自然史系の同好会と言えるでしょう。このようなグループに直接参加していなくても、人はみな「自然」を愛し、日々何らかの形で「自然」と深く関わり合っています。このような自然を愛する人々の活動を支援し、その活動の拠点となるような博物館を私たちの手で創り育てて行きたい。NPO「静岡県自然史博物館ネットワーク」はこのような主旨で、前身の静岡県立自然系博物館設立推進協議会から変身して新たなスタートを切りました。身のまわりのローカルな自然からスタートして、東海地域、日本列島、西太平洋－東アジア、全地球、そして宇宙にまで広げたグローバルな視点で、「自然の成り立ち」を理解し、再び足もとの自然を見つめてみましょう。きっとかけがえのない地球の営みが見えてくることでしょう。そして、この地球がいつそう愛おしく思えてくることでしょう。このような県民の知的活動の場を提供し、それらを支援する体制を整えた自然史博物館を是非私たちの手で創りましょう。

静岡県にふさわしい自然史博物館のあり方

濱田 隆士（福井県立恐竜博物館館長）

平成15年4月20日（日）午後1時40分から3時10分まで静岡商工会議所401会議室にて、静岡県自然史博物館ネットワークの第2回総会の記念講演会が行われました。第2回総会の記念講演として、放送大学教授で、福井県立恐竜博物館館長でもあり、また（財）日本科学協会理事長である濱田隆士先生においでいただき、「静岡県にふさわしい自然史博物館のあり方」というテーマで講演をしていただきました。

濱田先生には、平成13年秋に自然博推進協で福井県立恐竜博物館を視察させていただいた際にも、丁寧に御案内いただき、静岡県における自然史博物館の必要性や静岡県らしい博物館のあり方などについてもお話をいただいたことがありました。

今回は、濱田先生がこれまで係わられてこられた神奈川県立生命の星・地球博物館や福井県立恐竜博物館などの実績も踏まえて、長時間にわたり、静岡県における自然史博物館のあり方についてお話をいただきました。

この要旨は、濱田先生の講演に基づき、事務局で要約したものです。

静岡型博物館とは何か？

神奈川県立生命の星・地球博物館の館長のとき、箱根にたくさんある博物館の館長さんたちによる談話会を作り、博物館相互の連携をはかった。これを拡大して南関東博物館ネットワークも構築したが、福井県立恐竜博物館の館長になって、同様のことをやろうとしたがなかなかできなかった。これは各地域、県レベルで政策の実施手法が異なり、ある県では当然のことでも別の県では違った手法がとられるためであった。それぞれの県独自のやり方があるので、それらをよく見極めて取り組む必要があるのではないだろうか。

日本の博物館は、日本の文化や学術、技術、経済などと同様に欧米から輸入されたものであり、日本型とは、すなわち輸入型にほかならない。

静岡県は日本列島のほぼ中央にあり、日本一高い富士山と日本一深い駿河湾がある。静岡県の博物館は静岡県のスタイルと顔をはっきりと見せることが重要ではなからうか。

物や人材、場所など予算的な制限が多くあり、これに加えて、大学をはじめ国立博物館や研究機関などの独立行政法人化の動きの中で、県で



講演される濱田隆士氏

博物館をつくる場合には民間の活力を大いに使うことは当然のこととなるであろう。

静岡県は周辺域に、すでに県レベルの大型の自然系博物館があり、これらに挟まれた格好になっているが、日本全体の自然史系博物館の分布を考えると日本の中央部（静岡地域）にぽっかりと大きな穴があいている状況にある。静岡県には、今は博物館がないが、できた時には最も進んだ博物館となる可能性もある。

県立の博物館だからといって、県民だけをターゲットにしているようではいけない。県外からも多くの人が集まるような魅力のあるもの

にしなければいけない。勿論、より広範囲な広報活動も必要であろう。最近では博物館にも外部評価が行われ、人がどれだけ入ったかという数が重要視されるが、どれだけリピータを増やせるかが最も重要である。

静岡県は東西に長く、深海から高山へとその自然環境も変化に富んでいる。しかし、県立の博物館のいざ目玉になるものという、「これだ!」というものがない。まさか特産品のワサビを前面に出すわけにもいかないだろう。目玉となるものがなくてはならないが、それは、「特別大きいか、超珍しいか」のどちらかである。対象を海外に求めてみるのも一つの手かもしれない。

エレクトロニクスなどの工学も自然の法則を利用しているので、工学まで範囲を広げてみてはどうだろうか。IT（インフォメーション・テクノロジー）が自然史を盛り上げたように、エレクトロニクスも自然史を盛り上げるのではないだろうか。

箱物になぜ こだわらねばならないのか？

博物館は「もの」を展示し、収納する建物が必要で、それはいわゆる箱物と呼ばれるものである。「博物館は箱物にこだわることはない」という考え方もあるが、箱物のない、いわゆるIT型やアウトリーチ（出張博物館）型だけでは博物館として十分ではない。また、最近の博物館の教育活動では、物に直接触れたり、解説員とマンツーマンで接したりするハンズオンの手法が取り入れられている。このような状況を考えると、財政的な問題もあり、箱物のハードと箱なしのソフトの利点を生かした中間の形態が考えられる。

博物館には「もの」がなくてはならない。そして、その「もの」が語ることをいかに伝えるか、いかに魅力的に見せるかが重要なのである。

博物館活動が全てを握る

イベントの後に、そのコアとなった施設がそのまま残って、博物館となった例がある。すでに博物館がある場合でも、そのような施設が博物館の分館や収蔵庫となる場合もある。

博物館活動の中で、イベントを企画することは重要である。また、博物館の活動には中長期

的な計画が必要であり、たとえば博物館が立ち上がったとしても5年先までの活動計画が決まっていけないような博物館では長く持たないであろう。NPOの活動では、博物館をつくることへの意気込みはあるものの、見通しをつけにくいので、今後は博物館そのものの活動を中心に歩いていくことが重要だろう。

県立の博物館であっても国際的な視野がほしい。グローバルなことがわからなければローカルなこともわからないし、反対にローカルなことがわからなければグローバルなこともわからない。

生涯学習を生涯楽修と 読み替えるべし

私は、「生涯学習」を「生涯楽修」と読み替えている。学習とは学び習うことだが、博物館では教えてもらったり習ったりするのではなく、自ら楽しんで知識や研究を修めてもらえるように仕向けたい。たとえば、目の不自由な方に恐竜の大きさを知ってもらうために、音で体感できるシステムを採用したり、解説も書いてあることを読んでもらうだけではなく、音声で聞いてもらったり、さまざまな方法を試行すべきであろう。

博物館では今後、ハンズオンや体感を取り入れたユニバーサルデザインの展示が重要になるであろう。

これからの楽修姿勢は、 超年齢・超領域を柱に

博物館はオープンなものであり、世代を継いでいくところに博物館の意味がある。最近では、フリースクールのスタイルが盛んになり、自主的に個人などがつくる街角博物館も多く、これらが地域の特性を生かした街角博物館群を形成している場合もある。この様なミュージアムやスクールもこれからは重要になってくる。博物館における楽修姿勢は、年齢を超えて、領域を超えたところにこそ魅力がある。

静岡県では、後からできる博物館として、これらのことを踏まえて、特色のある静岡方式の博物館を是非作っていただきたい。

太田川河口の干潟にすむハゼたち

北野 忠 (遠州自然研究会)

福田町に河口がある太田川の下流域には、大規模とは言えませんが良好な干潟があります。今回は、太田川の干潟で見られるハゼの仲間をいくつか紹介したいと思います。

まず、もっともよく目にするのがヒメハゼです。干潟に住むといっても、やや砂まじりの所がすきで、体も砂に似た模様をしています。このほか、食用となるマハゼやウロハゼもみられ、休日には釣り客でにぎわいます。

干潟の泥の中にもハゼの仲間はすんでいます。チワラスボは、全長 30 cm 近くにもなるハゼで、一見するとウナギのようにもみえます。体は赤褐色で、眼は非常に小さく、おまけにヒゲ状の突起をもち、お世辞にもかわいいとは言えませんが、泳ぎは下手でどことなく愛嬌のあるハゼです。このほか、からだ非常に細長いヒモハゼや、口が大きく、顔つきがサンショウウオのようなエドハゼもみられます。これらはいずれも良好な干潟にしかすめないのので、県内での生息地はそれほど多くはありません。言い換えれば、太田川の干潟はこれらの種類が生活できるくらいに良い環境であるといえます。

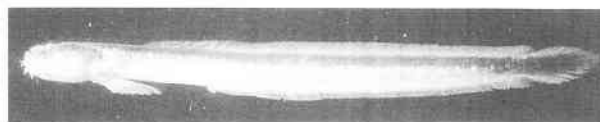
夏から秋にかけては南方系のハゼが見つかることもあります。クチサケハゼ、カマヒレマツゲハゼは、これまで沖縄県以南でしか公な記録がありません。写真の個体は昨年の秋に採集したもので、おそらく分布の北限記録になります。今後調査を継続すれば、もっといろいろな南方系の魚類が見つかることでしょう。

太田川では、今回紹介したほかにも、非常に多くのハゼたちをみることができます。しかし、一見良好な環境であるようにみえる太田川の河口域も、少しずつ変化しているようです。川で出会った古老の漁師によれば、30 年ほど前と比較して漁獲量はおよそ 10 分の 1 になったとのこと。また、以前はトビハゼ (地方名: トビツチヨ) がいたようですが、絶滅してしまったと言います。残念ながら、少しずつ環境は悪化しているのかもしれない。

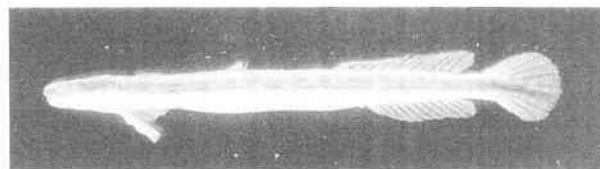
とは言うものの、太田川は本当に楽しい場所です。干潟に行けば、いろんな生物との出会いがあります。興味のある方は是非足を運んでみてください。でも、その際には、深みにはまったり、泥から抜けなれなくなったりしないよう、くれぐれも事故のないようにお願いします。



ヒメハゼ



チワラスボ



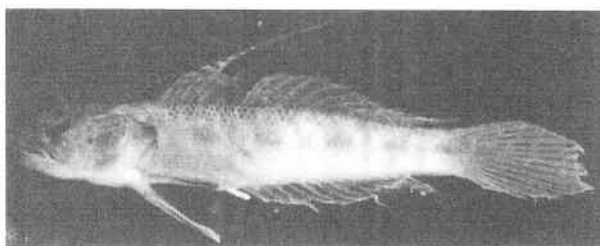
ヒモハゼ



エドハゼ



クチサケハゼ



カマヒレマツゲハゼ

社会の変化が分布を変えたウスバシロチョウ

清 邦彦 (静岡昆虫同好会)



富士山麓のウスバシロチョウ

白い半透明の羽を持つウスバシロチョウは、大きさもモンシロチョウを一回り大きくしたくらいで、とてもアゲハチョウ科には見えませんが、赤い点こそないものの、ヨーロツバなどで人気の高いアポロチョウの仲間なのです。静岡県での分布は限られていて、伊豆半島や富士山麓には生息していませんでした。静岡県中部でも、海岸地方には見られず、安倍川や大井川の山間部に分布し、特に茶園、それも良質の茶の産地によく見られました。1年のうち5月だけに姿を見せるこの蝶は、茶つみ時の茶園の上を緩やかに滑空するように飛んでいました。

ウスバシロチョウの幼虫の主な食草はケシ科のムラサキケマンです。成虫はムラサキケマンの近くの枯れ草や小石などに産卵します。そのまま夏から冬を越し、翌春孵化した幼虫がムラサキケマンの葉を食べて育ちます。この卵が夏の高温に弱いため、海岸地方には生息できない、良質の茶園のある地域は夏に霧が発生することが多く、これが卵の越夏に好都合なのだと考えられています。

1978年から、富士山には分布しないはずのウスバシロチョウが、富士山から発見され始めました。富士北麓の別荘地、西麓の開拓地、西南麓の耕作地周辺などからです。北麓に進入したウスバシロチョウはやがて山中湖、静岡県の

小山町、そして御殿場市へと分布を広げてゆきました。西南麓に入ったグループは富士宮市北部から富士市の北部へ、やがて1992年には裾野市の十里木に達し、1995年には御殿場市の分布域とつながりました。つまり富士山麓をぐるっと取り囲んでしまったのです。

ウスバシロチョウは草地と樹林が交じり合った環境によく生息します。食草のムラサキケマンは湿潤で肥沃な土地を好むようです。富士山麓は、乾燥した草原地帯、あるいはうっそうとした樹海や植林地などで、そのような環境条件ではありませんでした。ところが別荘地の開発は人為的に草原と樹林の交じり合った環境を作り出しました。一方、このころ政府の減反政策や農家の後継者不足などで、山間部に休耕地が目立って増え始め、肥沃で湿潤だった土地にはムラサキケマンの群落が見られるようになりました。ウスバシロチョウの分布の拡大は富士山麓に限った話ではありません。日本の社会の変化が蝶の分布を大きく変えてしまったものと思われまます。

ところで最近、もともとの生息地であった山間部の茶園周辺でウスバシロチョウの姿を見なくなったという話を耳にしました。茶園にまく殺虫剤のせいではないかとささやかれたりしているのですが、どうでしょうか。



富士山麓のウスバシロチョウ生息地



静岡県の植物 (1)

静岡県で発見された

アマギシャクナゲとキョウマルシャクナゲ

杉野 孝雄

静岡県には南アルプスと富士山にハクサンシャクナゲ、南アルプスにキバナシャクナゲ、天竜川以西にエンシュウシャクナゲ、天城山にアズマシャクナゲが知られていました。1964年に東京大学の山崎敬博士は、アズマシャクナゲとホンシャクナゲの分布の接点になる静岡県西部で、中間的な性質を持つシャクナゲを見出されました。そして、これに京丸伝説にちなんでキョウマルシャクナゲの名を与え『植物研究雑誌』に発表し、天城山のシャクナゲもこれと同じとされました。

キョウマルシャクナゲは、花はアズマシャクナゲと同じ5数性ですが、枝振りにしまりがなく、葉が大きく裏に毛がほとんどないことなど、ホンシャクナゲの特徴を持つとして、ホンシャクナゲの変種とされています。本州には東北、関東から山梨県に5数性のアズマシャクナゲ、中国、近畿から中部地方に7数性のホンシャクナゲが分布していて、キョウマルシャクナゲは西日本のシャクナゲとされたのです。その後、山崎博士は天城山のシャクナゲはキョウマルシャクナゲに比べると、葉はやや厚く若葉の表面に白色の綿毛があることに着目し、キョウマルシャクナゲの品種アマギシャクナゲとされました。

1981年に筆者は京丸山のキョウマルシャクナゲを調査し、花は5数性がほとんどですが6数性の花もあり、6数性の花は花弁、おしべ、子房も6数性になることを『遠州の自然』No.5 (1982) に発表しました。この6数性または7数性が混ざることは、アマギシャクナゲやホンシャクナゲでも知られています。山崎博士は5数性と7数性について、7数性が基本で5数性はそれが分化して生じたとされています。そうであれば中間形があって当然です。

最近、D. F. チェンバレンとF. ドルシーは日本のシャクナゲ類を①古くから存在する群：アズマシャクナゲ、ヤクシマシャクナゲ、エンシュウシャクナゲ。②新しく展開した群：ホンシャクナゲ、キョウマルシャクナゲ。③複合的な性質をもつ群：ツクシシャクナゲと3群に分けられると推論しています。この考えの基本になっているのは、花の5数性と7数性の変異の幅です。

これらシャクナゲの分類は外部形態に基づいています。日本のシャクナゲの系統がどのようなものであるかについては、遺伝子解析など著しい進歩を遂げている手法を用いるとより明確になるのではないのでしょうか。静岡の花はツツジです。シブカワツツジ、スルガヤマツツジ、オオヤマツツジの由来などツツジに関する課題は山積しています。これらの課題に、若手の方で挑戦される人が出現することを期待しています。

なお、学名は次のようです。

Rhododendron degronianum Carr. subsp. *heptamerum* (Maxim.) Hara

var. *kyomaruense* (Yamazaki) Hara キョウマルシャクナゲ

form. *amagianum* (Yamazaki) Hara アマギシャクナゲ



静岡県の鳥(1)

サンコウチョウ

文：三宅 隆・写真：飯塚久志

「ツキ ヒ ホシ ポイ ポイ ポイ」森の奥から朗らかな声が聞こえてきます。そっと近寄ると、枝から、尾の長い小鳥がさっと空中に飛び立ち、虫を捕らえて、またもとの枝に戻りました。双眼鏡で見ると、30cmはあろうかと思われる長い尾と、目の周りのコバルトブルーのリングがはっきり見えます。

これが、1964年、静岡県民の投票により、県の鳥に指定されたサンコウチョウです。サンコウチョウは、5月上旬頃、東南アジアから渡ってくる渡り鳥（夏鳥）です。比較的低山で、沢沿いの薄暗い林に生息し、枝の又部にコップ型の巣を作り、オス、メス協力して子育てをするスズメ目カササギヒタキ科の鳥です。英名を「パラダイス フライキャッチャー」つまり「極楽のヒタキ」といわれ、姿も声も美しい鳥で和名のサンコウチョウはその鳴き声が「月、日、星」の三つの光と聞こえるところから三光鳥とつけられました。

県内では、県西部の浜名湖西岸から県中部の由井町までの比較的低山の低い地域で連続的に分布し、伊豆半島では、標高の低い海岸部に限られ、半島内部では確認されていません。県東部では、愛鷹山麓から小山町にかけての富士山麓に、低地から標高1,000m以上までの広い地域で、比較的高い密度で生息が確認されています。

しかし近年、年によって増減はあるものの、以前に比べて見られる地域が減少しているように思われます。県が1994年～1996年に実施した生息調査でも、その傾向が見られています。野鳥の会でも、近年、丁度サンコウチョウの生息に適した里山地域を通る第2東名の工事に伴い、見られなくなったり、少なくなったりした場所の報告が多く寄せられています。

サンコウチョウに限らず、全国的に夏鳥の減少が叫ばれています。越冬地の自然破壊や捕獲圧などが原因の一つと言われていますが、日本での繁殖適地の減少も見逃せません。県鳥でありながら、県民が見られなくなってしまいます。そんな事が起こらないよう願うばかりです。

自然学習・研究機能検討会の報告に関連して
静岡県立自然史博物館の博物館としてのイメージ
柴 正博

2001年度から2002年度に開催された県企画部での自然学習・研究機能検討会では、2002年10月に報告書がまとめられました。その報告書の「第3章 自然学習・研究の拠点施設のあり方」の3では、自然学習・研究の拠点施設、すなわち自然史博物館のテーマと内容が示されています。今後私たちが、静岡県の自然史博物館のイメージをより具体的に構築していくために、ここではこの内容についてご紹介したいと思います。

**ふじのくに～その大いなる自然～
静岡県の自然の豊かさを未来に伝えたい**

自然学習・研究の拠点施設のテーマとして、上のタイトルが挙げられています。その内容として、このテーマタイトルをより具体的に表現するために、以下のような3つの項目(軸)にそって立体的に静岡県の自然学習・研究のテーマとメッセージが構成されています。

**水の旅
(プロローグ)**

水の循環からみた静岡県の自然

静岡県の豊かで多様な自然の現状を実感するために、「水の循環」という視点から静岡県の自然をめぐる旅にでかけてみよう。静岡県には天竜川、大井川、安倍川、富士川、狩野川など日本を代表する河川があり、富士山には永久凍土や湧水、伊豆には温泉、西部地域にはため池や浜名湖、そして南側には駿河湾や遠州灘が広がり、深海には海洋深層水もあります。

静岡をめぐる水循環の代表的ないくつかのコースを、「水」になって源流から中流、下流、河口域、海岸から沖合域と旅をすることによって、静岡県の現在の自然の多様さや豊かさについて体系的に認識することができ、さまざまな展開や驚きが期待されます。

静岡県には高山帯から里山、河川、汽水域、陸棚浅海域、深海域までの各種の自然環境が一セットそろっていて、しかもそれらは人間活動の影響圏にあります。静岡県は自然界をめぐる物質循環を考える上で世界の中でもモデルとなる地域の一つといえるでしょう。河川の水は

陸から海に向かう物質循環を担っていて、静岡県の海洋生態系にも大きく影響を及ぼしています。静岡県の自然が多様であること、そしてそれらの多様な自然は個々が独立しているのではなく互いにつながりをもっていることを訴えたいと思います。

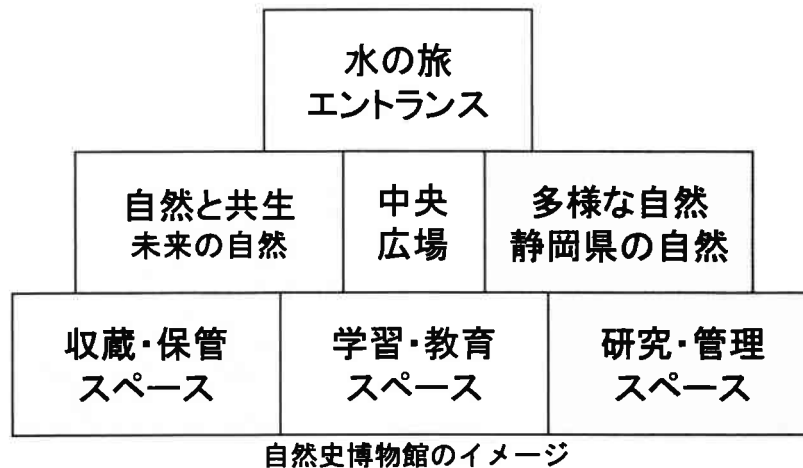
**多様な自然のドラマ
(メインテーマ)**

現在の静岡県の自然がいかに豊かで多様なものかを実感したら、今度は時間の旅にでかけて、静岡県の自然の生い立ちをたどってみましょう。静岡県の地形・地質の成り立ちや、そこに生きる動植物の種類や生態は、中緯度帯における地球と生命の相互作用の織りなすシンフォニーともいえます。

静岡県はユーラシアプレート、フィリピン海プレート、北米プレートの境界付近に位置しているといわれ、世界的に見ても特異で活発な地殻変動帯にあるといえます。地殻運動は、東日本と西日本とを隔てる糸魚川-静岡構造線やフォッサマグナなど本州弧の重要な地形・地質構造を形成し、高山から深海までのさまざまな自然環境をかたちづくってきました。

静岡県にはそのような多様な自然環境にさまざまに適応・進化した多彩な動植物が生息しています。重要なことは、県中央部から東部にかけての地域が、東日本と西日本を隔てるフォッサマグナにあたり、その地域が数百万年前まで海だったことから、動植物の分布と多様性において他県では見られない特徴をもっていることです。

静岡県は日本列島の地質構造だけでなく、生



物地理区の成立過程を考える上でも東日本と西日本のフロンティアにあたっています。静岡県の自然環境と多様な生物相がどのように形成されてきたのかというドラマは、日本列島の自然史を解明していく上でも重要であり、静岡県は地球と生物の歴史を、一体感をもって語る上でまたとない地域といえます。

静岡県には、富士山をはじめ、伊豆半島、南アルプス、浜名湖、駿河湾など自然資源または個別テーマとしても魅力的なものがあります。これらの個々のテーマに関して、地質・動植物の生い立ちや現在の生態系についての理解を深めること、そしてさらにそれら個々の自然環境の間になどどのようなつながりや背景があるのかを探り、静岡県の自然の豊かさや多様性についてのダイナミクスを、一体感をもって理解を深めることがメインテーマです。

自然との共生 (エピローグ)

未来に伝えるメッセージ

静岡県の自然の生い立ちや歴史をふまえた上で、未来へと意識を広げてみましょう。静岡県では古くからその自然を生かした人と自然の共生が行われてきました。しかし、ここ数10年間の社会や経済活動の急激な変化によって、里山などに代表される人と共生していた自然の荒廃や自然破壊が広がっています。「静岡県は自然の豊かな県である」といわれてきましたが、その自然環境に関する体系的な研究は現在ほとんどなく、その標本や資料も蓄積されていません。静岡県の現在までの自然環境の実態をきちんと把握して、そしてその「豊かさ」を次

代の県民に引き継ぐための活動を、県民とともに行っていかなくてはなりません。

また、持続可能な未来のためにどのような自然観を私たちがもつのかという課題に対しては、環境破壊や環境汚染の問題だけでなく、自然災害の観点からも自然を見直す必要があります。静岡県は火山噴火・地震・津波・海岸浸食・台風などあらゆる自然災害があり、その点で世界的に見ても特異な地域です。防災やサバイバルという側面から自然災害をとらえるだけでなく、自然の成り立ちという観点からも理解を深めてゆくことで、自然と人間との共生のあり方について、静岡県ならではのメッセージを世界に向けて発信できると思います。

なお、検討会報告書では、第3章の6で、自然学習・研究の拠点施設の運営を支えるサブシステムとして、(1)県民との協働、(2)学校、博物館、大学、研究機関等とのネットワーク、(3)自然環境や自然災害に配慮した設計と運営システムがあげられています。

今年度は、標本資料の保管・整理事業が県の企画部ではじめられますが、これに協力していくと同時に、目指すべき静岡県の自然史博物館の具体的なイメージを私たちに作り出すことをさらに進めていきたいと思っています。

なお、自然学習・研究機能検討会の概要については、<http://www.pref.shizuoka.jp/kikaku/ki-21/index.htm> に掲載されています。報告書については、<http://www.spmnh.jp/hpnature/intro/02kento01.htm> に掲載されていますので、ご覧ください。Web ページがご覧いただけでない方で、報告書を希望される方は NPO 事務局へご連絡ください。

インフォメーション

静岡県版レッドリストが発表されました

静岡県は、県内の野生動植物の専門家からなる「静岡県自然環境調査委員会」を設置し、平成9年度から県内野生生物の生息・生育実態調査を行ってきました。なお、「静岡県自然環境調査委員会」には、NPO 自然博ネットの会員の方も多く参加しております。そして、平成15年4月14日にレッドリスト（レッドデータブックに掲載すべき野生生物種を絶滅のおそれの程度でランク付けしたリスト）を発表しました。現在は、保護対策の基礎資料となる「静岡県版レッドデータブック」を作成中のことです。

静岡県環境森林部自然保護室のホームページによれば、レッドリストはそれ自体が法的規制等の強制力を持つものではありませんが、効果的な保護対策を推進できるよう、野生生物の

おかれている状況を広く一般に理解してもらうために情報提供するものです。希少な野生生物を指標として、大規模開発などのさまざまな人間活動が野生生物にどのような影響を与えるかを予測し、生物多様性を守っていくにはどのように行動すればよいのかを考えるための基礎資料となるものと期待されます。

今回のレッドリストでは、絶滅のおそれのある種（絶滅危惧Ⅰ類及びⅡ類）の合計は、植物で402種、哺乳類で2種、鳥類で44種、爬虫類で1種、両生類で5種、淡水魚類で15種、昆虫類で45種、陸・淡水産貝類で31種となっています。

これらの詳細な内容については、静岡県環境森林部自然保護室のホームページより見ることができます。アドレスは以下のとおりです。
<http://www.pref.shizuoka.jp/kankyoushizen/>

自然研究会・自然保護団体の紹介

(財)日本野鳥の会静岡支部

〒420-0816 静岡市沓谷 5-4-2 Tel & Fax: 054-208-5466

日本野鳥の会静岡支部は、昭和39年創立した主に県中部地域にお住まいの方々に構成される会員数およそ700人の自然保護団体です。活動内容は、探鳥会、月1回の室内例会、機関紙の発行、調査研究など多岐にわたっています。

探鳥会 毎月3回（休日2回、平日1回）、バードウォッチングの会を実施しています。主な探鳥地は麻機、大井川、御前崎、富士山、朝霧など。
室内例会 月1回（原則として第3木曜日・夜）教育会館で行っています。会員同志の交流と鳥や自然をより理解するための映画や講演などを始め、会員が写したスライド、野鳥情報が中心。

機関紙の発行 原則として月1回、機関紙「野鳥だより」（支部報）を発行しています。探鳥会、室内例会の案内、野鳥情報、会員の投稿記事などもりだくさんの内容でお送りしています。

調査・研究 毎年全国一斉に行われているガン・カモの調査、サシバ（タカの仲間）の渡り調査など実施しています。全国の調査結果が日本野鳥の会本部に集められ、野鳥保護のための資料になります。
会員の種類と年会費 正会員 会費¥7,500（入会時は入会金¥500をプラス）、普通会员 会費¥3,000（入会時は入会金¥500をプラス）、特別会員 会費¥12,500（入会金不要）、家族会員 上の3種類の会員と同一住所の家族の方は年会費が一人につき¥500で家族会員になれます。会員証が送られます。

入会の申し込み 郵便振替で郵便振替番号 00140-5-98389 (財)日本野鳥の会
通信欄に会員種別と静岡支部入会希望と明記の上、お申し込み下さい。



各研究会の行事

県内の自然関係の研究会・同好会などの各団体で開催する、自然観察会や講演会などの行事をここでは紹介します。自然博ネットに加盟されている各団体は、これから行われる行事をご連絡ください。

静岡県地学会総会記念講演会

模式地砂浜におけるナウマンゾウ再発掘の意義

講師：池谷仙之（静岡大学理学部教授）

日時：2003年6月22日（日）

13時～15時30分

会場：静岡県地震防災センター

静岡市駒形通 5-9-1 TEL:054-251-7100

駐車スペースが少ないので、公共交通機関を利用してください。

後援：静岡県教育委員会

入場料：無料

静岡県地学会第40回総会・記念講演会

一次申込みを受け付けた後、参加予定者には二次案内を出します。

野外自然観察会のお知らせ 静岡県自然史ハイキングがスタート 遠州里山の自然史を歩こう！

NPO 静岡自然博ネット・静岡県地学会共催

里山は身近に親しめる自然環境として注目を集めています。静岡県には山地から平野部にかけて多くの丘陵が広がっており、豊かな里山の生態系が日本列島の東西の動植物の分布をつないで息づいています。そんな静岡の里山の自然史をハイキングしてみませんか？ 地層観察や化石採集を通して過去から現在までの大地の歴史を感じ取り、植物や鳥類・哺乳類などの観察を楽しみながら、里山の自然の成り立ちとその未来について思いをはせてみてはいかがでしょうか？ 地質から動植物まで専門の方のガイドを聞きながら、静岡各地の自然史をいろいろな角度から深めて歩く第1回として、

掛川・袋井地域の里山を選んでみました。地元だけでなく広い地域からの参加も大歓迎です。県内・県外の自然を比べ歩き、対話・交流をすることで互いの地元の自然について大きな発見があるかもしれません。

期日：2003年8月24日（日）10時-15時
（小雨決行）

交通手段：JR掛川駅南口に10時現地集合。バスによる移動とハイキング。

参加費用：中学生以上1名1000円。小学生以下は無料です。通信費・資料費・バス代・保険料ほか。当日支払い。

案内：延原尊美（静岡大学教育学部助教授・静岡県地学会）、三宅 隆（日本野鳥の会静岡支部長）、杉野孝雄（掛川草の友会会長）、田辺 積（化石収集家）

日程：掛川駅北口（10時）→袋井市大日で化石採集（12時）→可睡斎・油山寺周辺で昼食後、動植物の観察・散策（14時）→貝化石など自然史標本の見学とまとめ（室内）（15時）

参加申込：7月30日（水）までに氏名・年齢・住所・電話番号・メールアドレスを、FAX（054-238-4640）もしくはハガキで下記まで。家族同伴の場合は全員の氏名・年齢をお願いします。定員40名（先着順）。

〒422-8529 静岡市大谷 836

静岡大学教育学部地学教室内

静岡県地学会事務局

夏の自然史ハイキングの係

持ち物：観察・記録用具、昼食（弁当）、飲み物、雨具（雨天の場合）、虫さされ・虫よけ。運動靴・帽子等、ハイキングに適した服装でおいで下さい。

二次案内：参加を申し込まれた方には、8月18日ごろまでに必要事項をお知らせします。